

お手紙

2019.11.20

11月2日（土）は、午前中に梁川高等学校創立百周年記念式典を執り行った。午後からは、記念公演として、本校の卒業生である村上敏雄さんのご家族による「村上ファミリーオペラコンサート」を催した。

先日、学校に手紙が届いた。村上様からだった。少し読んですぐにお母様の悦子さんだとわかった。御年82歳である。丁寧な自筆の手紙、いやお手紙と呼ぶべきものだった。

校長先生、音楽の先生始め

梁川高校の皆さま、この度は 百周年記念の式典おめでとうございます。

その栄えある大式典の日に 名もない私たち「村上ファミリーコンサート」を呼んで下さいまして誠にありがとうございました。 多分

「どんな形でやってくれるのかな?・・・」と

皆さまが不安な日々を過ごされたのではないのでしょうか?

実際にお会いしているのでわかるのだが、悦子さんの人柄がにじみ出ている文面だった。悦子さんは、長らく小学校と中学校で音楽を指導されてきた方である。きっと素敵な授業をなさってきたにちがいない。コンサート後に、生徒の感想を同封して礼状を送らせていただいた。

この度は又、立派なご丁寧なお礼状をいただいて大変恐縮しております。

その中にとっても心温まる生徒の皆さんの感想文がいくつも入っていて心打たれる文章、お気持ちばかりでした。うれしくて何度も何度も読み返しております。

生徒の皆さんにいい感性が身につけているんですね。生徒の皆さんのすばらしさがよく解りました。

うれしくて何度も何度も読み返しております。そして大切にとっておきます。

音楽の先生、他の先生方のお骨折りに感謝して・・・

自筆の丁寧な手紙をいただく機会はめっきり減ってしまった。そもそも自分が滅多に自筆で手紙を書くことをしない。メールにラインにと通信手段は多様化している。しかし、自筆の手紙だからこそ伝わることもある。大切なのは、用途に合わせた使い分けだと思う。村上悦子さんのように達筆な字で手紙を書くことはできないが、これは、というときに、心を込めた丁寧な文字で自筆の手紙、いや「お手紙」を書けるようにしておきたいものである。

梁川高校の生徒と接していると、普段の生活の中でも、「優しいなあ」と感じさせてくれる場面に出くわすことがある。人の心の痛みがわかること、相手を思いやる気持ちがあることは、学力がどうのこうのという以前に人として大切にしたい部分である。今回は、村上悦子さんにも本校生徒の“こころ”が伝わったのだと思う。ありがたい「お手紙」である。感謝である。